

正しい日本語を子どもたちに

合理性がない言葉の変化は、間違いだ！

言葉は時代とともに変化する。新しい言葉がどんどん増え、新しい言い回しも増えていく。その中で、子どもたちは毎日、たくさんの言葉を獲得しながら成長していく。子どもたちには正しい日本語を伝えることが大切だ。流行に乗って間違った言葉を教えたら、それはその子から一生離れないものになるかもしれない。(下村 勉)

言葉は変化する。例えば平安時代の言葉も日本語であったが、今日の日本では通用しないものが多い。文法も変わっている。言葉は人間が社会生活を営むために不可欠な文化であり、変化に対応していかないと新しい時代に生きていけない。けれども、変化は理にかなったものでなければならぬし、間違った変化は拒むべきである。

子どもたちは乳幼児期の片言の時期を経て、次第に大人の使う言葉を自分のものにしていく。やがて一日20～30個もの言葉を獲得するようになり、幼児期になると流ちょうな日本語がごく自然に話せるようになる。この時期に正しい言葉を教えることが重要なことは言うまでもない。大人たちが何気なしに使っている間違った言葉が子どもたちにも伝えられる。現在、日本で進んでいることばの変化の内、気になることをいくつか挙げてみる。

「ら抜き」言葉は今のところ日本語としては間違いだ。

たとえば、「食べられる」から「ら」を抜いて「食べれる」という「ら抜き」言葉がずいぶん広がっている。「(お客様が食事を) 食べられる」という尊敬表現と「(もっと) 食べられる」という可能表現、そして「(弟にオヤツを) 食べられる」という受身表現も「食べられる」とするのが正しい日本語である。ところが、実際には、可能を表現する場合は、「ら」を抜く人たちが増え、「ら抜き」は今や多数派になっているのではないか。

テレビの画面を注意して見ていると興味ある現象が見られる。まず、アナウンサーは例外なく「ら抜き」言葉を使わない。「アナウンサーは正しい日本語で話すべし」と、きびしく教育されているのだろう。一方、画面に登場する一般の人は少なくない人が「ら抜き」で話している。それなのに、登場者の発言をそのまま表示するはずの字幕(テロップ)には例外なく「ら」が挿入されている。字幕は正しい日本語に修正されているのだ。新聞などでも同様である。

尊敬表現も可能表現も受身表現も同じく「られる」とするよりは、可能表現の場合は「ら」を抜いた方が分かりやすいのは確かだが、日本の共通語を定める国語審議会は許



容していない。だから、上述のようなテレビ局の複雑な対応も行われるのだ。

このような状況であれば、「ら抜き」が今のところ正しい日本語ではないことをふまえて子どもたちに教えるべきである。「もっと食べられる?」「もう食べられない?」と話しかけるべきである。漫然と「ら抜き」言葉を教えるべきではない。

しかしながら、これは日本語の変化の過渡期にあつて、複雑で悩ましい問題ではある。

「で抜き」言葉は明らかな間違い。

たとえば、「〇〇です」と言うべきところを、「〇〇っす!」と若者たちが格好良く話す。これは合理性のある「言葉の変化」ではなく、「言葉の乱れ」に過ぎない。まだ一部の世代の一部の人たちに限られているから心配することもないかもしれないが、間違っても「で抜き」言葉を子どもたちの前で使ってはならない。

既に成っているのに、なぜ「なります」なのか

たとえば、「これが説明書になります」「これがお求めの商品になります」などと表現されることがある。ところが、目の前に提示されたのはすでに立派な説明書や商品になっており、これから説明書や商品になるものではない。なぜ「なります」などと未来形の表現をするのか。「説明書です」「商品です」と言い切るべきだ。

「なります」と言った方がより丁寧、鄭重な表現であると錯覚しているのではないか。事実とは食い違う言い方だから、誤解を生むことにもなる。この変形には合理的な理由はないから、「言葉の乱れ」というほかない。

「全然だいじょうぶ」は正しい日本語ではない。

「全然」という言葉は、「心配ない」「もうからない」「うまくいかない」など、否定的な文脈の初めに据えられる言葉である。したがって、「大丈夫」など肯定的な表現に使うべきではない。ところが若者言葉として無抵抗に多くの人たちに使われている。無意識のうちに合理性のない変化が定着することは避けなければならない。

繰り返しになるが、間違った日本語を子どもたちに教えるべきではない。保護者や保育者の何気ない間違った会話が子どもたちの心に定着していく。心すべきことだ。

短信

2021年度の決算公開中 大津あいあい保育園を含む社会福祉法人 唐橋福祉会の決算がWEB上に公開されている。収入総額は2億1888万6969円、支出総額1億9559万8208円、収支残額は2328万8761円となった。当年度は大きな工事がなく、結果として2300万円超の剰余金が出た。剰余金は、園舎などの老朽化対策積立金に充当された。詳細は[WAMネット・社会福祉法人の財務諸表開示システム]を閲覧いただきたい。

2023年度新入園児の募集始まる 来春4月入園希望児の見学説明会が9月2～9日の間、当園で行われる。1号児(保護者が就労していなくても入園できる子ども)の申し込みは9月20～27日に当園にて行われ、2・3号児(保護者が原則として就労している子ども)の申し込みは9月20日～10月21日に市役所で行われる。当園の新入園可能枠は、1号児5名、3号児23名程の見込み。

定員削減は2027年度に延期 当園は、適切な保育環境を保持するため、園児定員を2025年度までに計20名削減する計画を進めてきた。しかし、市当局との協議をふまえて、この計画実施を2027年度まで延期することになった。このため2026年度までは、現在の定員135名のまま、実園児数125名で運営する。